

病
秋
心

痴心

蘇一之句集



昭和38年2月帰国直前
フレズノにて

父政書

父政書
父政書
父政書
父政書
父政書

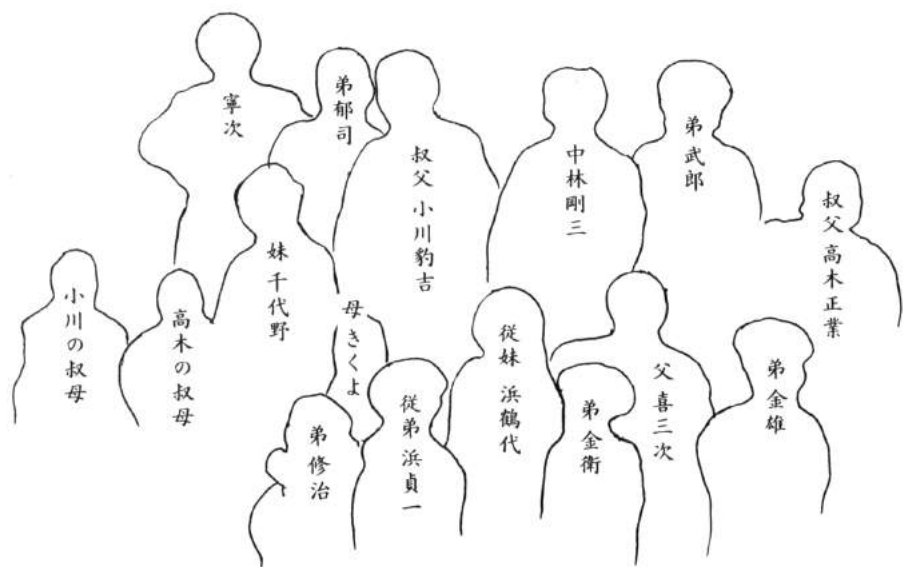
一

五十七年春の日記

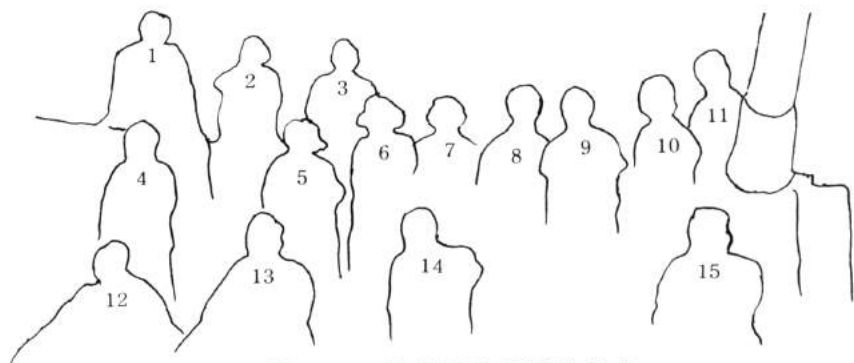
春はる夜ふり着ま羽田にはる

一

命ふり一とらや抄後見世一

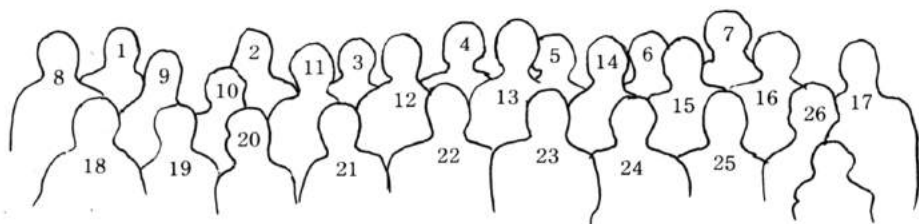


渡米送別記念
 (明治四十年七月十六日 於自宅の庭)



ヴァレー吟社創立五周年記念
 (1932年春 於フレズノ市ローデンパーク)

- | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|---------------|------|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 |
| 松田碧沙明 | 河田道子 | 尾沢寧次 | 尾沢わか | 五明玲子 | 上丸子常 | 隅田麗紫 | 細田千代子 | 篠田葉子 | 龜野知子 | 嵯峨小紅子 | 山田秀穂 | 武田瑞峰
(上丸子) | 三輪古絃 | 増本美篠 |



寧次帰国歓迎句会

(昭和38年6月23日 於皇居内パレスクラブ)

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|----|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 |
| 院 | 根 | 齊 | 安 | 田 | 米 | 尾 | 九 | 福 | 齊 | 河 | 福 | 星 | 山 | 仲 | 岡 | 木 | 山 | 岡 | 中 | 松 | 尾 | 高 | 鈴 | 今 | 院 |
| 瀨 | 木 | 藤 | 藤 | 中 | 谷 | 沢 | 貫 | 島 | 藤 | 合 | 島 | 野 | 崎 | 野 | 本 | 暮 | 田 | 田 | 塚 | 宮 | 沢 | 橋 | 木 | 井 | 瀨 |
| 見 | 浩 | 賢 | 路 | 穂 | 清 | ま | 十 | 直 | 恵 | 夢 | 一 | 武 | 多 | 利 | し | 羽 | 蒲 | 多 | た | 寒 | 晩 | あ | 六 | 美 | |
| 統 | 二 | 露 | 雨 | | | さん | 中 | 子 | | 舟 | 思 | 夫 | 加 | 三 | 六 | 公 | 可 | づ | 骨 | 次 | 甘 | つ | 石 | 登 | |
| 吉 | | | | | | と | 花 | | | | | 士 | 郎 | 郎 | | 英 | 子 | 子 | | | つ | み | | 里 | |



「寧次さんの顔」

昭和41年1月23日 山崎多加士 画

目次

病愁

続病愁

西部防衛司令官の日本人住民への指示書

日系人強制収容所全図

いきづき

句集の句

非土の情感

年譜

あとがき

病

愁

此句集を父政貴の墓に捧ぐ

アメリカにて

政
文

咯血を嘔み下しながら漸く神戸に着いた子規の心を思ふ時いつも泣ける僕だ。

二十余年来毎年死線を越えるやうな肺炎の頻発から遂に結核と診断されたのであるが、その直後に日米開戦となった。そして五月にはフレズノ・アセンブリーセンターに収容され、十月にはヒラ・センター病院に収容されたのである。

此句集はその前後の記録であり、旬日誌である。

日米開戦当日からヒラ・センター病院に移さるゝ迄の病人の迷妄であり、一病俳人の戦時中の旬屑である。

一九四五年五月

北米アリゾナ州ヒラWRAセンターにて

尾 澤 寧 次

凍

雲

一九四一年十二月七日 日米遂に開戦。
第二の故郷として住みつきし地は敵の国であった。

きのふとおなじあたり雲凍ていくさ

かばかり冬雲のガム樹が高い往き来

妻と対ひ物言ふにペリーの寒日

祖国の言葉響くすみれ草返り

日本は遠い家の裏おもて梅嫌

プラタナス其他裸木霧ながれ戦となり

家ふかくさざりを感じ日本放送待つ

禁足令一

冬あやめむらさき家に籠り夜となる

店の奥水仙のび道幅がひろい

この日冬の日おごそか陽のあれば雲あれば

すずかけ枯れてばかり池の水にこり

くらし来て冬の木々池に藻草の沈み

緋

桃

西部沿岸撤退令下る 一
ゑのころぐさ枯草の天氣追放迫り

重庄と混乱の中にも春は酣 四
わが家敵の国緋桃ちる陽の中に

オレンヂ花にほふ道ゆくべ桑の実落ち

春暁ほのぼのこごめ花いくさある国

桜もちり薔薇垣根雀の尾が動く

立退期日迫り静臥療養をゆるさず。
友人諸兄のヘルプを得て漸く準備整ふ。

家のうちそと収め五月の日ざし鯉うく

木
賊

五月十六日 フレスノ・アセンブリーセンターに収容さる。
住みなれし吾家を去る。

離散の日来て木賊青いやら名残

二十年この道の松の落葉をふみ

さつきぞら犬は走りお寺の屋根見ゆ

惜別犬と戯れ青い柳がしだれ

シーラ雪山夏めく眺めゲートとざす

さぼてん一と夜さの花メーイルボックス外す

禁足ラッパ

プレスノ仮収容所生活。

キャンプは急造のバラックにて、フロリン地方の同胞を合し約千名。

花苗のび別に二世の情緒禁足ラッパ鳴る

幼なきこほろぎとび黒き土間に馴るゝ

狭まく小砂をしき焚火すすこし

夏山のうしろへ日落つ無口の癖

苗床片かげりあやすみどり児笑ふ

一と朝涼しき荒板の壁を飾る

早月ぞら旗なびく兵隊どこかへ発ち

僧侶一束のグラデオラス持ちあした

明けゆくいろとともに病みコイン芽立ち

玩具を作り朝の日ざし腰すゑて試す

火取虫おつ衰へし手の日焼けたり

遺族正しくあまたの花遠いいかづち

小供ら小石拾ふ食事の列二三日曇り

日本書籍禁ぜらる

凡日糠蚊舞ふ原一っぱい入り陽

街燈の明るみに歩み出た若者の全身

タンク見ゆるあの附近に栖みし夏の空

毎晩夏虫ころす桃の皮ぐるりと剥げる

二羽の鳥見失ふ病めばいつくしむそら

夕べ人に抱れ赤児は母の顔のみ趁ふ

備蓄へ土間の住ひ日本勝つ

夏の朝土のかたまりうちくだきたる

太陽暈しまろし食事足れりとす

昼三日月の高さ監視塔建ち麦の秋

總髮白く老ひ給ふ乳母車押し炎天

病をおしてデッチ掘りに参加 一

土の香りシャベル重過ぎて咳き

無花果茂り鉄管載る男力こめぬる

寢 椅 子

朝に夕に庭の寢椅子に臥し空に親しむ。

朝のくもり黒き虫いもの葉より落ち

微熱続き衰弱甚しくて病深きを思ふ 一

をんな予定より早いお産らしい氷水をのみ

寢足らぬ子下駄作る日覆の父へ来し

病葉ちる木の間がくれの人を見送り

初更の家あひゆく土の乾きに咳き

星の尾消え夾竹桃の花をんな

寝椅子にゐて砂白し生きやう願ひ

幼女白き靴厭ぐまず日輪草野生

第二区の同胞立退を命ぜられ友人誰彼別れに来る 一

死別の感じ炎暑砂利ふんで君達去る

子蜘蛛長い脚して走り牛の貌平凡

逐はれ病むこゝろの隅に青匏育ち

青年父に輸血して戻り日高く青い松かさ

みいくさ遠い百日草の虫ころす

をとめ三世のいのり念珠房あかく雲ちる

木蔭にベッドを移し余命なき男眠り

胸の痛み黎明星あり菜の虫息す

某癡発狂 二

狂女に朝のきもち赤い葵へ近づく

夏草しげり狂女追ふ母のこゝろ

カクタス一鉢の灯を消し咳きつづく

病衰日にやけ蜻蛉とぶひくい鹿

写真版日本兵士紅顔たのもしく夏の夜

体重減りゆく寝椅子の星がとんだり

西瓜間抜けた芽生えどこか琴のしらべ

尺蠖背を曲げへちまの窓に咳く

虫づきし大根の葉裏がへし孫ある男

月のまろいこと妻と語らふ草枯れ

肺二つこの世このまゝなる蒼い虚

面会日砂丘過ぎゆく日照り人も病み

夏夜汽車の笛だつたり人声にも馴れ

医師去りしあと寝椅子に臥し地面乾からく

時々悪寒襲ふもろこしの花近くも歩き

仔鼠唇をよごし女はカンナを剪る

仄か月代の明り微熱つづくからだ

朝顔一棚不和な家庭の人にまじり

残暑の土ふみレントゲン診察明日

憲兵附添ひ郡立病院へレントゲン診察に行く一
残暑のほこりづきたる草々昏れ

こほろぎ

肺結核と診断 二

家に入りこの日あるをこほろぎを捕へ

立退き植えし葵が咲き診断きまる

秋
の
日

九月二日入院。

フレスノ・センター病院生活。

病衣が触れコスモス散るくらい枕べ

アネモネの花病みてあれば国は遠い

看護婦体温とりまだき灯を消し去りぬ

アルカンサー州ジエロムに送らるゝ事となり、人々日々列車にて
出発す。

はらから奥地に送らるゝ残暑といふべき

焚火燃え人遠く去る秋の暁け方

盲人マンザナに送らる 一

盲人旅立つ夜のくもり草冷ゆ

鶏頭枯れる

十月十六日 肺患者の家族は病人を残して先発、アリゾナ州ヒラ

・セクターに送らる。

数日来病状悪化、熱高く苦し。妻は泣き泣き汽車に乗りしと聞く。

咳づき妻と別れ鶏頭枯れる

妻去りしあと病屋^へ白し鳳仙花はじけ

体温とり妻のたより熱高き朝

造

花

十月二十四日 我等もいよくヒラ・センター病院に移さるゝ事となり、医師 看護婦附添ひ出発す。郡立病院入院中の患者合して十五名なり。

造花を捨て、旅たつ朝寒み病む

朝顔紺の花医師ゐて担架に乗り

番兵制すあたり見送うけつ草かも秋

砂 漠

旅 中 吟。

山ふかく雑木林の夜の風落ち

砂漠一と村棕櫚の花など遠い禿山

医師注射器を持ち枯原鳥一羽たち

山に真向ひ葉を嚙む汽車まだ加州を走り

砂漠の中にて停車、下車し少時休憩。

アルカンサー州行の列車より友人達来りて別れを惜しむ。
発熱と疲労とに漸く砂漠に立つ。

あきあかね身にちかく砂漠の白い雲

病衣のまゝ草の穂立やはたゝとぶ

秋の蝶病むか高原旅の半ば

芭蕉のしげりに群雀羽音沈めてしもふ

セージ秋の原旅に裸山ばかり

対岸山かすみうみがや折れるつる

涯しなき砂漠のまただ中に渺々たる大湖魔の如く横たはる。湖辺人の住むなし。

三

ふるさとはもつと遠い湖べ草生え

いくさ加州を逐はれ砂漠の湖波たゝぬ日

山に貧しく牛飼ふ家の日ざし

山麓秋の川涸れ熱高くなる午後

加州を離るコロラド河の流れ霞切啼く

アリゾナ山のかたち土人牢残り晩秋

セージ原秋暑しアリゾナに入るか

夜半小寒村の停車場に着く。アルカンサー州行の同胞とも別れ一車台がのこされ、センター病院よりの出迎自動車を待つ。

寥々夜汽車着きどこまでも砂漠

親切なりし附添の白人看護婦とは此駅にて別る。

寒村の停車場は砂漠に続き、時々梟が鳴いたりしてゐた。

帰りの夜汽車を待つ白衣の姿は淋しくも尊いものであつた。

夜ふけて砂漠の村秋ふかきくさき

統
病
愁

前掲「病愁」以後ヒラ收容所病院
へ入院してから、終戦後再びフレ
スノへ戻るまでの三年間の句。

セージ原枯れ病衣ぬくめて着替ふ

片肺くずれ冬夜造花の影のみ

一と夜咳かず眠り冬の窓日のぼる

カクタス原ローカルトレインぽっぽと走り

いくさこの年除夜の鐘砂漠に鳴る

山鳥来啼く早春のセージ原遠く病愁

病思安けく眠る茫々百哩の平原

病歴語り合ひ一人眠り二人眠り冬の夜

死期近き人と並び病み金盞花二人が見た

附添ふ老婦人に夜が更け椅子が寒そう

窓の月明り臨終ちかづく近親の人々動くさま

手をさしのべ逝きし人のベッドに触れてみる

亡骸移されたあと黄一鉢を持つ未亡人僕を見た

病棟並び建ち二月の日の出

妻と金の話になり雨来るやよひ

春の山へ砂漠の窓を開け放つ病人

レストアワーに入る仰臥春の雲動く

雨一日の静けさ遠き山は見えず

雨のそら雲昏く物の音叱る

病愁或日は郷愁お月さま欠けた

日の出の位置山裾に移り黒い犬通る

砂漠雨ふり喀血あとの眠りにおち

放馬遠くも駆り伝説の山黒い

水を飲み窓に炎暑の月あかりまた水を飲む

南国アリゾナサンセット雄大金色の雲動く

まこと砂漠に雨ふる音のみぞレストアワーに入る

病棟裏戸あり鳥の糞など歓喜

さむざむ更け星の位置夢は忘れた

砂漠にも四季のながめネルの寝巻に代へ

世の中のでで虫と僕とゐてでで虫角を出し

ゼネヤ一輪崩れ遠くダストストーム迫る

啞蟬いとけなく生れ木の肌あらく鳴けない

木は雨にぬれ家に雨だれの音聖日昏るゝ

薬草掘り来て妻は枕へ土こぼし

夕べくる幹にゐて蟬は動かず鳴かず

新患者体温とる窓から山の重なり

山鳥鳴き去る方へ方へと歩き朝露消ゆ

雨雲夕焼けて仔馬親から離れ

石二つ拾ひうてば石の音砂漠にくだけ

一九四四年一月元旦

入院中無菌にて経過良き患者だけ新年の帰宅を許され、僕もその一人として十時過ぎ自動車にて送られる。

ヒラ転住所に移され入院生活二年余となり初めて我家なるものに帰宅す。バラック・アパートの一室にて、フレスノ集会所と大差なく、天井など馬小舎の如し。

フレスノより来し家族の人多く、知友歓び迎へてくれる。

一月二日

九時半の病院よりの自動車にて病院へ帰る。

ただ一日の帰宅なれど、全快の見込つきたるが如く心明るし。

初日見んと起きいまだ日の出ぬ砂漠

巨人カクタス立つ山が
つらなり一月一日

入院二年一月一日の
土踏む

一歩も足踏み入れぬ
これがわが家一本高い木

教会に鐘が鳴る元日の
足揃へ少女

鉄柵の中に生れし子もまじり元旦

遠い山に雪しろく枯木の影ある日ない日

友人の子 一

二年の背丈のび襟巻をたらし

二年病む身を庭に下り草に触れてみる

二月八日日本より二回目の通信 一

鬪病一生を年老ひ祖国の便り枯草鳴る

妻の病棟僕の病棟夜霧につままれ霧にほふ

昨夜の雨の窓まだ濡れてゐて日の出

春の雨廊下はうすく灯りどの病室も病人眠り

雁発ちすでに整然窓あつて病む

病人いくさの話仰ぐ帰雁の慕情

春や一と夜さ原の中病舎あり雨の音雨だれの音

人逝きし翌朝の陽ざし立木の長い影

退院する少女梢の芽吹くを見てから車に乗り

土人先住のいくさを語り寒卵まろい

僕の胸かくも薄く余寒しレントゲンへ立つ

レストアワー看護婦音たてず来て花生けて去りぬ

癒えて家に住むストーブ入れどん天

忍苦二年敵の国妻は大根干す

ざんげばかりの病みて痰が赤い

青い葉のついた桃をむく病臥のまゝ

靄る日中死んだ人の荷物ならば

団扇を持ち睡眠時間にまだ間がある

長い病臥の日盛り病葉ゆつくり落つ

今日鳶とび日系兵士戦死の話水をのむ

朝顔枯れ秋ふかき音いくさいよくはげし

いくさは勝つものとし一世豆蔓の糸を張り

小猫欠伸したやゝ寒し胡椒が赤い

晩秋の雨一日何か拝みたきころ日本は遠い

雀住みつき三年のいくさを病み髪をつむ

雨ふりつづき一望の原枯れ牛が歩く

大根干しつらね雨だれ眠る

雨の夜大根漬ける樽のかたち

好日原から手をあげて少年

歩く方に冬山のかたち仕事から帰り行く人

祖国より慰問の玩具アヒル歩く

カレンダーの絵だけ残し配給の日本

曇つてアリゾナ州元日の落葉はく

元朝の心くずさず歩き人とも会ふ

一月十七日 日本より二通の音信あり、日付は昭和十九年十月三日。

兄弟及び政人の消息を知る。 七

セージ原山鳥鳴き早春芽ぶき

籠りて干大根に風吹く日本の便り

雨のふり枯木のかたち祖国には遠き国

政人兵に召されし便り野に鳥飛び病む

女は涙し易く豆の花いろうすく

あけて星は消え夢はどこへすてる

冬の日照る砂漠に祖国はヒルも見えない

砂漠の蜘蛛の脚が太陽に細くて長い

小山のうしろ汽笛鳴り牛の白くちらばり

春の原鳥とぶ油さし今日も二世出征す

春の光鳥とび肺菌げらく　　嗤ふ

恋猫日南にゐて大根とうがたち

人形の顔を描き墨のいろ雨の音

山に影し雲動く葬ひより帰り

快期の少女壁に倚り春の日ざしに満身触れ

訪ね来て友の家春の日輪戸口

こほろぎ部屋に鳴き手製の椅子が堅い

遠い稲妻二世三世お盆を踊る

赤ン坊の重さをよろこぶ一家の庭にゐる

オークラの花しろく薄暮の馬かける

少年野鳥をしつかり抱き野分あと

露国日本へ宣戦 一

朝壁にしろい虫匍ひ放送終りみだれ

広島へ原子爆弾投下 二

葱の枯葉口に吹き思出を消しとばす

宵居の壁に地図ありこほろぎ殺す

平和 一

葉の虫草の色に生れ夜は灯にとび

キャンブを丟る 四

千成瓢箪ころがり夫婦に雨ふる

毎日人去る別れ干瓢乾き

木の葉ちる門の出入り遠山雪らし

寒い寒い雪山のかたち黒人街行く

フレズノ帰還後

ガムトリーの実おつ加州よきところと云ふ

寺の石段に鳩の羽毛とび僧侶暮し

ユーカーの実一年落ちたまゝ地めん日ざし

いちぢく畠冬枯れ山まで続く

サボテン花のまゝ掘り来て孤独がくづれる

祖国には遠い草生へては枯れ無縁仏の墓

師走ある庭僕かな錢を妻と算ふ

移民三代目栄えパーム並木お天気

鈴懸の実枯れたまゝカラ／＼笑ふ黒人の頭脳

旅券八七一四九号五十年たわけ有明の月

父母は胸のうちにある狭霧茫々と月の所在

夢は猿に食はれ月明の庭から低い物の音

少数移民の生活感情戸毎街路樹に月照り

すゝり泣く少女よ黒人と生れ萩の花より去る

喀血十年生き鱚のチリ鍋など絶対けなす

木曾節口ずさみ骨は米土に埋む気で蚊蚊が刺す

西部防衛司令部及び陸軍第4軍

戦時市民管理局

カリフォルニア州サンフランシスコ駐屯地

1942年5月3日

以下の地域に居住する

日本人

を先祖にもつ

すべての住民に対する指示

カリフォルニア州ロサンゼルス市の、ノース・フィゲロア通りがロサンゼルス市の中央部と交通する点を基点として、その中央部を南にイースト・ファースト通りまで下り、同地点より西へイースト・ファースト通りに沿いアラメダ通りまで進み、同地点よりアラメダ通りに沿い南へイースト・サード通りまで行き、同地点より北西へイースト・サード通りに沿いメイン通りへ行き、同地点よりメイン通りを北へファースト通りまで行き、同地点より北西へファースト通りに沿いフィゲロア通りへ行き、同地点よりフィゲロア通りに沿い最初の基点に戻る線と囲まれた地域。

本司令部の1942年5月3日付市民排除命令第33の条例に従い、外国人、非外国人を問わず、日本人を祖先とするすべての住民は上記の地域より1942年5月9日土曜日正午12時(PWT)までに疎開せられる。

上記地域に住む日本人は、1942年5月3日土曜日正午12時(PWT)を過ぎるは特別許可証なしには居住地を変更してはならない。特別許可証は：

カリフォルニア州ロサンゼルス
ノース・サン・ペドロ通り 120
ジャパニーズ・ユニオン教会

に置かれた市民管理事務所の高カリフォルニア地区司令官代理より得ること。この許可証は家族を集める目的または重大なる緊急事態の場合のみ与えられる。

この疎開によって影響を受ける日本人に対して市民管理事務所は以下の援助を与える用意がある。

1. 疎開のための注意と指示を与えること。
2. 不動産、事業用及び専門的機具、家具、台所用品、ボート、自動車、軍需などの財産のほとんどのものの管理、賃貸、売却、その他の処分に関して助成すること。
3. すべての日本人に家族単位での仮の住居を他の地域において提供すること。
4. 人間と混れた量の衣類と道具を新しい住居に移動すること。

守るべき指示事項

1. 各家族の責任者一人、できるだけ家長または財産の大部分を所有している人間、一人で居住するものは本人が、詳しい指示を受けるために市民管理局に出現すること。出現時間は、1942年5月4日火曜日午前8時より午後5時まで、1942年5月5日火曜日午前8時より午後5時までとする。

2. 集合センターに出現する疎開者は以下の物品を携帯すること：

- (a) 家族各員の寝具、シーツ（マットレス不要）
- (b) 家族各員の洗面具。
- (c) 家族各員のための余分の衣類一揃。
- (d) 家族各員に充分なだけのナイフ、フォーク、スプーン、皿、鉢、カップ。
- (e) 家族各員の欠くことのできない個人的な持物。

すべての物品はしっかりと梱包し、所有者の名、及び市民管理事務所で作られる指示に従って番号をつけること。荷物の大きさと数は、個人及び家族が運べるだけのものに制限される。

3. どんな種類にせよペット動物は許可されない。
4. 集合センターには、個人の持物及び家財を選びこむことはできない。
5. 合衆国政府はその機関を通じて、冷蔵庫、洗濯機、ピアノ、その他大きい家具などのかさばる家財のための倉庫を提供するが、すべて所有者の責任においてのみ保管される。調理用品及びその他の小型の物品は、梱詰めされ、梱包され、所有者の名と住所がはっきりと書かれている場合に受けつけられる。一家族が使用する名と住所は一つに限ること。
6. 各家族及び一人で居住するものに、集合センターまでの運送手段が提供される。また、監督された集団であれば個人持らの自動車で行くことが許される。移動に関するすべての指示は、市民管理事務所で作ること。

更に詳しい指示のために市民管理事務所へ
1942年5月4日火曜日午前8時から午後5時、
1942年5月5日火曜日午前8時から午後5時の間に来たれ。

米陸軍 J・L・デウィット中將

日系人強制収容所全図



収容所開設と閉鎖

収容所名	所在州名	開設	閉鎖	収容所名	所在州名	開設	閉鎖
トバズ	ユタ	42年9月11日	45年10月30日	ジェローム	アーカンソー	42年10月6日	45年6月30日
ポストン	アリゾナ	42年5月8日	45年11月28日	マンザナー	カリフォルニア	42年6月21日	45年11月21日
ヒラリバー	アリゾナ	42年7月20日	45年11月10日	ミネドカ	アイダホ	42年8月10日	45年10月28日
グラナダ	コロラド	42年8月27日	45年10月15日	ローワー	アーカンソー	42年9月18日	45年11月30日
ハートム	ワイオミング	42年8月12日	45年11月10日	ツールレイク	カリフォルニア	42年5月27日	46年3月21日

「米園日系人百年史」新日本新聞社刊より

ふきりき

大正九年から昭和十六年の日米開戦前まで、即ち『病愁』直前までの句を持ち帰った句稿より選句した。

年度別に袋に入れてあったが四年分欠けていた。また後掲の「句集の句」に有るものはこれを除いた。

雨よ元旦よ人間が静寂だ

霧の夜の枯枝も包まれて私とゐし

ペン先を取りかへ秋雨の何書くとか

毎夜の妻が洗ふ茶碗の音きく

日本人街に出でシヨウウインドの桜餅

子供チンポコを出してアスペラ畑だ

ひたすら働き夏雲人間の親戚

小犬吠へしきる夏雲急いでる

独立祭の行列色どられて照る

夏帽あみだに冠る支那街の出入

落葉する牧師さんのつめ襟

秋の木の葉をふみ何れも他人

買ひものゝ金を与へおしみ猫柳が折れない

利子の話をきく窓から電線太い

マツチをすりすてる冬夜の都会

野良犬トボトボ空家の落葉をふみ

小銭数へ渡すに首巻が古び

人形を放さうとせず隣の子教会に行く

逝く年の油気のない髪をとく

小雨明るくむつき三日の家族

霜よけの油が燃ゆる黒い世界

屋根うつ雨や雨だれや寝返る

泣いてはだかの子庭の草をむしり

てうちぐるみ一つ二つ落ちすつかりしめつばい気候

人と生れてとかげの子を見てゐる山の暮色

谷川の水を飲み暮れかゝる谷のそら

鶏逃げ走る照りつく庭を通り

枕木掘り返され日盛りの赤い旗

ゲーム負けたよゆで栗もう一つつかみ

川に髪洗ふメキシカンの女太陽残る

古絃病み衰へ旅の車よりおり残暑

日本人支那人ヒリツピンと黒ン坊犬の交尾

ポプラ落葉のチャーチ人歩み来て

ゆたかにすわり子とくだく祭のくるみ

ひなたに土を掘るどの子も大きい靴

砂丘照りやけ積荷索く馬よたゝかれて

ちらとこちらを向いただけで働く人參畑の女
干からびて海藻うみに人無し

よるのまちなつのまちなりゆく日本提灯

朝顔べたく咲く紫に

枯株いくつか牧場の端の太った牛

愛犬レニンの死 一

秋のひ落つこの世に犬のほひ

鐘がなる一九三〇年除夜の鐘

メキシカンはだしにて物洗ふ日の照りて

道の小草実もち女同志は絹靴下の話

曇る日ぶどう畑に親と子と日本語

野菜束何んと顔の汚れて異人種の子たち

海よ沖に波しろし少しづつ歩む

畑鋤く土けむり馬に人に太陽空にあり

馬には角が無い牧場の牛らと草はむ

あるじ病み臥しくらし話声おとす茶碗鳴るだいどころ

これが世界一の無花果畑冬枯れて鳥たち

べらぼうに大きな邸宅空の黒き雪雲

雪原ましろし群れて鹿の歩むおと

うどん皿大きくて身がまへて冷うどん

陽よつよし街の屋根屋根たかくとがり

家のなかがらんとして病んでゐる

僕ら山へゆくふもとの村に豚は肥つてゐる

大滝仰ぐそらこれはアメリカの日輪さま

やまざと夜明け牛のちゝしぼる女

いま太陽視野にのぼる原牛馬いく百まぢり

葡萄段地一帯青み夏のそら

繁みに雀ゐるを見し平価切下げの日を考へたりして
しやぼてん幾鉢愚夫愚妻でよろしい夏の日に

女たち紫蘇の実摘みすてたりして話を途切らさない
しげる木よりずるくくと降り来しは黒ン坊の子

底値割れのメロン畠に犬かけたりして

野良衣にをんな肌をつゝみて不作の葡萄黒し

大空と不作の畑と人間の顔何をぼんやり

大きな立木枯葉をつけ野菜売の赤い大根

こゝろそはぬ日の雪ふりつむ枯木の枝は細い

かしこもすがれカリホルニヤ二番棉つむ黒ン坊をとこ

木に二つ三つ胡桃の実残りまいにち見る空

陸に廃船一隻ありそのほか港に浪たゝぬ日

造船工場の職工どか／＼ゲートを通り霧ふかい

葡萄ふさみのりてたれ女は母として年ふけ

木の花に蜘蛛は網を張り僕たち平穩にくらす

もろこし青くふくらかあつちうしうまひつじ

晩秋山の水うごく苔ある石

手も働きあれてゐて婦人髪油をつけるなど

村はぶどうみのりトラツクに積まれて労働者が着いた

どの草も夏枯れて妙な顔に生れた山羊の一生涯である

雨ふる日のぬれて木のくだものまろい

妹からの日本菓子をとべ夏夜はどの家にも灯がもれて

ハモニカ吹いて来て少年道に鳩を追ふ

町にみんな知り合ふ歳月南天地に赤い色

感化院の赤い建物に雨ふつてぬれて夕方

山が家麦のび豚はまろいけだもの

霧朝うすぐらき家うちみんな黙つて着物をきる

秋よごみかきを持ち長過ぎて女の子

紫苑咲きさかり犬と子供とゆくひろい地めん

秋の林の木の実赤く高いところに

鉢の木賊と僕と欠伸と曲つた額直してみたり

水につけてある豆腐秋一日

帰りて灯をともしすテーブルの上赤いりんご

牛乳にほふ雨の夜の壁に動かない秋蚊

立木はだか冬夜くろい家にかたち

食後の手のくみを思ひとがつたおとがひとも思ふ

あけ一日の出入り多く冬見る店の大きい扇風機

インテリその日ぐらしに人參生え

莫逆の友相次ぎて日本へ帰る

地上ぬれたまゝ暮るゝ日の猫柳花となり

秀穂病氣帰国 三

夏の夜は地の冷えて膝をとぢ

見送人かたまりレールぞひ油のついた枯草

をとこ泣きじやくり大きな機関車だ

砂にすわり誰の夏靴も白い

すでに雨来てレーズン乾き足らぬ日地上草の芽

背低き日本婦人にて野菜畠に馬を引きいれ

牛いつまでも不動のすがた日ぐれとなり牧場

雨の朝犬は池の水をのむ濡れて

悼 秀穂 一

秋の夜のしみじみ人を想ふ枯れて松葉ぼたん

ひやしうどん啜るみんな黒い毛をもつたにっぽんじん

仔鹿雨にぬれたちまるいまなこで遠方を見つめ

一望葡萄畑枯れつくしずつと向ふ黒い自動車走る

あさ霧ふかく土を踏みすゝむ脚の高い鳥

夏の朝仕事のバス来るを待ち黒ン坊かたまつてゐる

黙然爪を切らうにこれはわがからだのつちふまず

霜害二

ぶどう芽すつかり霜枯れ畑から鳥たち

一めん黒い畑に茫然歩くに草に芽のありて

大暑子供を抱きじつくり汗肌し菜を購ふ女

お盆の極楽浄土若い坊さん背が高く踊る

夜の地の冷えて来て唇をとぢ

秀穂一周忌一

或日は友だちすげなく別れ扇風機まわつてゐる

大樹鬱蒼くるみが生りて地主

日本人墓地二

ばくぜん墓地に来て誰の墓ともなく名を読みあたりすがれ花

有名無名人日本人の墓いくつかころがり霧の日

ヒリッピン婦人と対談の夜のチョコレートにがい

カリン羊羹食ふ冬の夜しみくふるさとのにほひを食ふ

前歯の無い顔ですうちわで蠅を追ふをんな

酒たばこを禁じ五年からだをいたわり夏の日

チエンストア一年々殖えシヨウウインドに朝の日はあたる

白粉花すがれ日向にすこし貰ひしぶどうを干し

落葉かくかさく音するに五十年生きて来て

棕櫚掘り倒し棕櫚の無くなつたわが庭

わづかのすみ花をきしに曇天この世は二人でくらし

すみくらすにみなよその子高いタンクありて日々

犬捕車に犬が泣いて夏枯れ原一すじ道

みゝず一缶づつの中に生きて日覆深くおろされた店

移民一生秋はほしぶどうによごれ老ひぬる

多弁すぎる昔のまゝの男と炉があつて

枯木立とげくしき幾日過ぎ

ちまた一日の呼吸ネオンが水をのむ

アスパラガス延ちちまい間がぬけて春の日

さくらばなそれだけの花と思ひ日本は忘れてゐない

お通夜終り棺側くろく人うごきお寺の高い木々

煙うすらぎしなかに見え草を焼く少年

われら在米三十年西瓜が冷えて

池にみず流るゝおと花枯れて久しきかきつばた

くだものみな実を結び終り黒人ホテル窓がない

夏夜ぞら世に一つの家をもちてねむる

日本人移民墓地 四

うつしよ秋ふけてゆくパイオニアのおくつきに対ひ

享年みな若き移民の墓供養の赤い花

手向花枯れた花手にとればかろし

移民の歴史日が照り月が照り草たちがれ

たまに堪へられぬふるさとごころどこからともなく薄雲いで

もろこし一うね枯立ち眼を病むメキシカン住ふ

もず来て雨やまないサンデーシューズ黒い

農作つひに富裕の年なく家鴨鶏と歩く

作物みな不況霜枯てハイウエー直線

鶏の足あとばかり不況島の土干き

闇汁の日の寒さあやめ茎ますぐ人を待ち

曇天どこかぼやけた世間向ふはだかの木

雲もれ射す陽の一線とどくところ麦秋

馬いなゝく方に拓け老ひてぶどう芽ぶき

月を失念して黒靴枯木影ふみ

大ざつばな裸山裾青み

雨の窓とぞす水仙の花冷え子無き生涯

映画に観る悪党の見本のやうな顔でいつも庭芝にゐる男

四月八日鳩がとびみんなと家を出づる

雨の夜となりどこの家も円満でない話犬をつなぐ

小夜福子素顔でバスに乗るへだてゝふようの花

レモンの花どこかで匂ふインカムタクス納めて戻り

ハイヒルの登音です白昼鳩とぶを

山水口にふくむ誰か上の方松葉ふみ歩く

山にかまどの石など拾ふ松葉は手にてかき

山くらい更けて滝の音遠い

少女けさ白靴少し献金にぎりて行く

移民孫ありて明日はこの国の土ともならん露草青く

白髪白髻ネグロ窓に倚り五月

乙女の瞳碧り牛から放れ

メモリアルデー朝の庭花ずたく切つてしまひ女たち

夾竹桃と貨車と工場地帯炎天

蛙の眼わがマナコまひる表の方へうごく

一茎水仙の青い葉氷囊の水を割り

今井五介翁渡米さる 四

今井翁八十二才の御高齡御老軀を以てニューヨーク桑港方

國博覽會日本協覽會長として、生糸將來の見通しと、日米

國交親善の國民使節としての用務を兼ね渡米さる。片倉方

平氏も同行す。桑港埠頭に出迎ふ。

海一トとところ洩れ陽荒き波

港のそら鷗とび髯白き温顔

シルク使節方平氏と歩く君が踏む霧の都の土

弟たちの消息を聞くホテルから見えて港の灯り

病めば懷郷 三

白粉花の実のこぼれて病む遠い日を算へ

父の御年より長く生き異國に冬のあやめ

かたい梨がみのり日本風呂沸つ家

菊島から犬は吠へて黒雲仰いだ嫁さん

出血止まらぬネグロ九十七才の御手と思ふ手当冬の日
につぼんみやげのぎんなんすべくしろい冬の夜

松田の建坊広島訛で帰り冬の夜

冬のそら曇り石礫は地にみじかく傾き

今井翁とお別れ 二

汽船ゆく一線冬の朝波たゝぬ湾

すゝき穂のなびく方日本へゆく海

ホテルの一室ともされずゐて海暁けゆく

海岸通枯やまへ来て港のそと

蓼など枯れつくし要塞地を米国土官通り

蓼の穂風の海ちかく士官住み日米戦争あるか

数日の旅 八

仔鹿からく雪ふんで来て陽のあたる地めん

上の滝見え下の滝しぶき新しい橋を渡り

毎日雪溶けて川ぞひの村世に遠き面テ

山の夜が明けきつた自動車のラデオフレスノをとる

一望放牧の牛どの山にも朝日さし

早春の都会漫然歩き女は漬物店へ入り（ローサンゼルス）

アポカード咲き市役所の長い石段にかたまりて話す（同）

何のそれがし女優馬場に鞭うち風光る（ハリウッド）

接木する声がふとく雨降り出す少し前だった

緋桃大方ふたばぞら愛国の旗を立つる日が多くなる

年中誰彼くるみを割りてたベボンく時計鳴る

牧師館がらんとして庭に猫うづくまつて春昼

毎日通り落葉する木を仰ぎ見る

少女縫いあがる衣物を持つ宵の灯に来る虫

蜂の巢落して焼く白い煙世界の方々戦さ

末のことまで案じ桑の木のしげり蚊がとぶ

オレンヂの花終り夜々ゲート閉めてある家並

夜ぞら重いとしさ家のかたち

一句の素材を得て構想をなすまでには、十数回は想をねり、それから表現上の推敲には三十回くらいは詠読を費やすだろう。そのくらいにしなければ決して一句の形さへ成さぬ場合が多い。

句集の句

—海紅句集その他より—

「海紅句集」その他に載った句を前掲の有無を問わず総べて採録した。

海紅句集

大正四年三月 海紅創刊より大正六年十二月に至る約三ヶ年間の句より一碧楼選。

大正七年二月十六日発行。

なし

海紅第二句集

大正七年一月以降大正八年十月に至る約二ヶ年間の句を一碧楼選。

大正九年五月八日発行。

なし

海紅第三句集

大正八年十一月以降大正十年八月に至る略二ヶ年間の句

より一碧楼選。

大正十年十月十六日発行。

うすら寒さの麦青き朝のしやべる男

逢嬉楼

海紅第四句集

大正十年九月以降大正十三年七月に至る略三ヶ年間の句

より一碧楼選。

大正十三年十二月五日発行。

落葉する河原一面の石ころ

逢嬉楼

樹々の太りに沿ひ住みひやゝか

逢嬉楼

海紅第五句集

大正十三年八月より昭和二年七月に至る満三ヶ年間の句より一碧楼薦。

昭和三年四月二十五日発行。

な
し

海紅第六句集

昭和二年八月より昭和六年中発表の句より一碧楼薦。

昭和七年十月二十日発行。

浅瀬の石のまろさ乾きてまろし

冬ひでりすゝきはらかれひるま

山鳥鳴くそこにくろき岩ある山の畠

虫づきし葡萄も熟れ色みある日の村人

家人みなだまりをる夏のコスモスの花ゆれ

馬の背汗ばみつ木の青きくだもの

霧雫すほそき枝々歩いて行かう

馬のたてがみが冬夜だくろい雲

緑野

—海紅第七句集—

昭和七年より十年末に至る四年間の句より一碧楼薦。

昭和十一年十一月十五日発行。

あちら落葉吹かるゝ立木家よりへだたり

黒き巖白き巖深山のひるのあめ

朝はなぎの大掠の掠は落ちぬ

憂しと思ふおたまじやくしうごく尾をふれあひつゝも

夏の日家にをり小供のあしおとなどきくはたのしく

もろこしの枯茎焼く火のこ空へ空へ

をんなふしだかき手にもち一たばの冬菜

金魚動くそんなものを見てゐないこゝろ

暗き地上に杏が熟れて星ぞら

くちびるもゝいる仔豚地上草しげり
けいとう莖やたらにふとい土に虫動く
蟻が手のうへを這ひ皺多くなりし手なりし
どんでん草もみじ窓のない建物低く
はらからやわが或日掘る枯草の根や
一めん秋の花横から見るわが家の全景

ざくろ

—海紅第八句集—

同人自選

昭和二十七年十月二十日發行。

水干て錢龜ねむる夜ルの僕一人の夜ル

日本人墓地 一

遠い日遠く来て死に砂原せんこうくづ

まだすこしあかるきそら家々灯しこの国びと平和

明日祝宴の旅の宿り炉を焚き

インヂアン亡びゆく宿命山にわらびがたけ

異人種の少年雜然遊び草一様の向きに枯れ

今井五介翁渡米さる 一

蒼い海へ港の空へ鷗とび髻白き温顔

病 一

堪へらるゝほどの秋の風まともコスモスなびく

ゆすらうめのびつしり赤いメキシカン身もち

山の端にゐて紅椿咲く日の海荒るゝ音

海紅同人句録句集

同人自選。(寧次の句編集同人選)

昭和四十七年六月十五日発行。

明治神宮御苑

清正公井戸の水を掬ふ妹も七十を越す

平安堂居

夫人のしとやかさに迎えられ仏前の空気秋

豪徳寺にて

国の興亡井伊の墓落葉とぶ身にうける

旧東海道

松の風情北を吹き五十三次スピード

芭蕉生涯展

秋の旅人芭蕉の短冊古び黒い制服の女学生

鎌倉にて

麻痺の女生徒おみくじ結び木の肌粗らい

父の忌日

冬空へ雲が消えてしもう方角

梅林寺句会欠座

一望の雪六花先生に失礼すころアマリリス

六花師米寿に

命ながしヒマラヤ杉聳え無風

観劇「阿部一族」

最後の夜謡い舞う舞台稲妻明り

自由律俳句集

——俳句三代集別巻——

荻原井泉水、中塚一碧樓兩氏審査。

昭和十五年四月十七日發行（改造社）。

雪のヨセミテ 一

雪原ましろし群れて鹿の歩むおと

憂しと思ふおたまじゃくしうごく尾をふれあひつゝも

旅 一

山に旅すがたをんなもす所に松葉をつけて

をんなふしだかき手にもち一たばの冬菜

幼な山羊遅れて山の枯草原をはしり

金魚動くそんなものを見てゐないこゝろ

蟻が手のうへを這ひ皺多くなりし手なりし

家家ぬれてゐて朝々落ちつづくくるみの実

どんでん草もみぢ窓のない建物低く

木瓜の実二つ三つみのり愚かしく日過ぎ

畑のかたい土にゐて蛙が鳴く春の日

けいとう茎やたらふとい土に虫動く

秋は草木の身に冷えてなつめをもぎて食ふ

自由律俳句作品集

— 新俳句講座第三卷 —

自選

昭和四十一年八月一日発行（新俳句社）。

在米中の作品

きのふとおなじあたり雲凍ていくさ（日米開戦）

ゑのころぐさ枯草の天気追放迫り（西部沿岸撤退令）

すずかけ枯れてばかり池の水にごり（レントゲン診断）

離散の日来て木賊青いやら名残り（一九四二年五月立退く）

花苗のび別に二世の情緒禁足ラッパ鳴る（プレスノ集合所）

尺蠖背をまげへちまの窓に咳く（入院療養中）

花過ぎし一鉢より秋蚊たち血痰赤い（癩禁忌）

吾等結核患者と家族はアリゾナ州に送らる 三

病衣のまゝ草の穂だちやはたたとぶ

山ふもと秋の川涸れ熱たかくなる午後

夜ふけて砂漠の村秋ふかきくさき

ヒラキャンプ内の病院よりインチャン肺療院に

ニューモ治療に行く旅中 三

土人村土かまどけむり白い鶏歩く

土人先住のいくさを語り寒卵子まろい

カクタス原ローカルトレインぽっぽと走り

ヒラキャンプ病院入院二年

砂漠雨ふり喀血あとの眠りにおち

巨人カクタス或夜は花が咲きガラガラ蛇眠る

いくさの年除夜の鐘砂漠に鳴る

まこと砂漠雨ふる音のみぞレストアワー

一と夜さ咳かず眠り冬の窓陽のぼる

片肺くづれ冬夜造花の影のみ

病棟裏戸あり鳥の糞など歎喜

ゼネヤ一輪崩れ遠くダストストーム迫る

放馬遠くも駆り伝説の山黒い

薬草掘り来て妻は枕へ土をこぼし

遠い山に雪しろく枯木の影ある日ない日(退院近し)

妻の病棟僕の病棟夜霧にぬれ霧にほふ（妻も入院）

石二つ拾ひうてば右の音砂漠にくだけ（退院後）

山鳥鳴き去る方へ方へと歩き朝露消ゆ

雨雲夕焼けて晴れ仔馬親から離れ

フレスノ帰還決まる

サボテン花のまま掘り来て孤独がくづれる

一九四五年九月二十六日フレスノ帰還後

祖国は遠い草生へては枯れ石碑のない無縁仏

日本移民三代目栄えバーム並木のお天気

鈴懸の実枯れたままからから笑ふ黒人の頭脳

旅券八七一四九号五十年たわけた有明の月

父母は胸のうちにあり狭霧茫々と月の所在

夢は糞に食はれ月明の庭から低い物の音

少数民族の生活感情戸毎街樹に月照り

すすり泣く少女よ黒人と生れ萩の花より去る

咯血十年生き鱒のチリ鍋など絶対けなす

木曾節口ずさみ骨は米土に埋む気で蕨蚊が刺す

自由律俳句作品史

上田都史・永田龍太郎編

昭和五十四年六月三十日発行（永田書房）

空蟬の詩情草のなか正午の光

麦秋の風の行手長者の名は忘れて通る

六花先生無口と申されビールの泡消ゆ寡黙は僕

汐見坂くづれたあたり脚が弱くたんぽぽほほほけ

松を刈り込み法被の男梯子を軽く扱う

母娘三代の顔であり夏の日縫屑ちらす

百人番所に武士の姿はない草ほこり

お寺のさつき空後槻さん僧形にす

柿の実落ち黒んでゆく心蟬鳴く

新緑の中大隅夫人の銅像見え藤の花

甲斐の山川夏めく武田滅びた歴史

岡谷の煙はどこだ豚児喜寿のすがた墓へ上らず

義齒をおき夏夜鬮骸と見へたは老耄

日野葦平の「麦と兵隊」を句にすることが日本では流行してゐるが、海紅俳人にそれが無いのはうれしい。あれは俳人の遊戯である。俳句製造の技術だけでは魂が入らない。



北米

尾澤寧次

日本帝国領土外の大地を踏んで生活闘争を続けてゐる私たち、その日々は非土の哀愁に平原の枯草を蹴りこゝろひそかに哭くでもあらう。その夜々は懐郷の憂鬱に日本茶碗のまるみを撫で親しとする。脚元どころがるたつた一つの石ころにしても、それは日本人としての生活感情の塊りであります。



人種の坩堝の中にほうり込まれてゐるこの矮小な醜くい黄色人種

も、次ぎの代には純全なアメリカ人として鎔け出されるであらう移民の一人である。



私たちはその句作態度に多少異つた要素を餘儀なくされて居るにせよ、一碧楼さんの歩んで行く道を専念に追ひ迎つて行ふとする一兵卒であり、傷だらけの俳句を海紅に発表して反省の清算場としてゐるものです。私達の句作の目的が移民文芸としての特異的作品に重心をおき、アメリカ特質のカラーを俳句の上にも織り出す事が達成されたらどんなにか満足でありませう。海紅俳句の上に移民文芸の片影だにも映り出されたらそれでよろしいのです。

だが、私たちの持つ特異的環境を日本の俳人に押売して其の鑑賞を強要し、自己陶醉に浸らうとする不純な心ではありません。

□

ブランデスの移民文学論をふりかざさなくとも、移民地に於ける文芸人の見詰めた事相は国際性を帯びた詩であり劇であり、特色づけられた異端であるに相違ないので。アメリカに於ける黒人の文芸が彼等のもつ特殊的環境から一国を形成して居り、アメリカ文学の一つの尊い存在であることは否定できません。

将来アメリカの国土に日本人系米国市民として繁殖されて行く吾等の子孫に、日本語と日本文字は残されても海紅派の俳句の残されてゆく事は望めない。でも、日本文学、黄色人種文学が特殊の色彩を帯びて残される必然性はある。将来日本に於て朝鮮人文芸の何物かが生れるであらう期待と同様に。

□

環境の相異を理由として、句作態度を不真面目にして概念的に流れ易い吾々の俳句に満足してゐやうとするのではない。私たちの季節的な感じにも日本人と大な隔りがある。等々自己の姿の見すばらしさに、かんく太陽は十一月の中旬に照つてゐるのです。

玲子の

子らよこゝにして延びゆけよ葡萄園一せいに芽ぶくには、同人の

これは支那の物の実冬夜にて食うぶる物の実

などに比較して稚拙欠陥の多い句であります。批判的検討を試みず作者の意図が何処にあるかを味ふて下さい。「子らよ」は

私たちの第二世であるアメリカ生れの日本人への呼びかけであり、「こゝにして延びゆけよ」は切実な第一世の祈りであります。それが芸術的表現に物足らなさがあるにしても内的生命の強さに感動されます。祈りであると共に或は日本と謂ふ吾々の生国に対する憧憬と呪咀との錯綜した感情が含まれてゐるかもしれません。芽ぶきいでたる葡萄園にはどれだけ日本人の汗と血と涙と命とが埋められてゐるか計り知れぬ開拓者の苦闘があるのです。この老衰期に入りつつある第一世の深い溜息を私達の歴史の頁に残して置く事は無益のものでないと信ずるのです。



ローカルカラーの鮮明な句として

群羊走り下りしところ山の湖

雫

一條道の山あひ蔭茂り

美 篠

浜風ふけば青いもろこしなびきもやまず

麗

遙かな沖よ煙上げて何処へ行くかあの船

葉 子

等の句にしても厳肅な批判を日本の俳人に求めやうとするのでなく、アメリカの、殊に加州の情景が描写されたと謂ふ努力さへ認めて頂ければよいのです。此等の俳句をびつたり日本の俳人の胸に感銘を求めるのは無理であります。



更らに海紅投句者中のグロチックな存在として、一碧楼さん桜磑子さんの特別な翫味と俳人諸兄の再吟味を願ひ度いものにアメリカ生れの青年の存在する事です。日本に国籍の無い俳人、日本帝国臣民で無い俳人についてちよつと考へてみて下さい。海紅俳壇の何処

の隅にも日本国民で無い俳句の作者と云ふ怪異的な俳人が他に存在してゐますか。日本人種でありながら米国民である此等青年の本当の心持が日本に在るあなた方に理解されますか。勿論此等の人は少年少女時代に日本に送られ日本の教育をも授けられたものであります。日本国民であると云ふ矜りと、アメリカ市民であると云ふ矜誇とは根本的に異つた思想觀念を持たされてゐます。



河田道子、森岡冬青、杜丘静枝、永山燁子、この四人は日本人ではあるが日本帝国臣民ではなく、北米合衆国の大地の上に産み落された米国民であるのです。

山の湯をいでてこの道月見草咲き

道子

地に赤い花のぬれて

静枝

黒鳥一羽二羽焼野原暮るゝ

冬 青

土のかほり花も咲きて

輝 子

など日本人である頭だけでウカツに此等の作品を読み過ぎないで下さい。此等の作者の特意的心境と、国民性の変態的な生活基調とがやがて特異的な作品として将来の海紅誌上に見られるやうになつたら、アメリカに滅び行く日本文学の哀感のほゝゑみであります。



海紅俳壇の一隅に氣息奄々として僅かに呼吸を続けてゐる私たちヴァレー吟社のグループは、此の異つた環境と怪異的存在とを押し進めて何等か特色ある作品を詠み得たとしたら俳人の破片である私達は限りない満足であります。

(原文のまま・執筆年月不詳)

俳句を志す人々から第一に質問を受けるのは
新旧俳句の優劣論である。私達はただ古い型
の俳句に私達の鑑賞力が満足しないから自由
律に據つてゐるのである。優劣論は五十年百
年後の俳人が決定してくれる。

尾澤寧次略年譜

明治十九年（1886）

九月二十八日 父喜三次（通称政貴）母つるの三男として長野県諏訪郡平野村岡谷（現在の岡谷市）に生れる。

本名 寧次（ヤスジ）、通称 政文。

生家は代々「麻屋」という屋号で麻問屋を営んでいたが、後には雑貨店を営んでいた。しかし父喜三次は明治十四年以後は専ら村治に尽瘁し、村総代となること数回、村会議員たることも久しかった。（信陽新聞「龍門記伝」より）

長兄は幼折、次兄がいた。後年異母妹一人、

岡谷の煙

冬日の湖がひかり今まともに見る岡谷の煙

中塚一碧楼

凍る湖に日が射せばもつとも遠く岡谷の煙

高橋 晚甘

岡谷の煙 岡谷の煙。この岡谷が僕の生れ故郷である。岡谷は諏訪湖畔の工業都市、往年生糸業の黄金時代にあつては工場の煙突は林立し、白亜のマユ蔵は巨城の如く並び立ち、煤煙のため岡谷の雀は羽根まで黒いと言はれたほどだった。

（寧次の「帰国俳人の身辺小品」より）

異母弟五人がある。

信州―長野県人はこう言うことが多い―には県歌と呼ばれる「信濃の国」という歌があるが、諏訪にはまた「諏訪郡歌」という歌があり、そのなかに

山河の形成おのづから

民のしわざをたすけつつ

農業商業日にすすみ

蚕糸の業は年にそい

内外の国にかくれなき

その名もしるき諏訪の宮

という一節がある。また、諏訪出身のアララギ派の歌人島木赤彦は

生糸ひくと甲斐の少女ら春来り山べ寒けみ

冬はかへる国

と詠んでいるが、明治年間より昭和十年代にかけ

明治二十年（1887）

八月十七日 母つる死去（二十四才）

明治二十一年（1888）

父喜三次 後妻きくよ を娶る。

（小学校の入学、卒業年等については未調査であるが、当時の就学年齢は六才、就学

ての諏訪は生糸業の中心地であり、とりわけ岡谷は大工業団地をなしていた。日曜日の岡谷の街は工女（諏訪では女工と言わなかった）で溢れ、まさに「女の都」「女護ヶ島」だったというのが私の幼時の記憶であり、山本茂実氏の「あゝ野麦峠」はこれら工女たちの哀史である、（ま）

年限は八年―尋常小学・高等小学各四年―であったので、高等小学校卒業は明治三十二・三年頃と思われる。そしてその後同村にあった藤森塾へ行ったらしい。

岡谷のある時代を支配した指導者は藤森塾の出身者であった。僕はこの塾最後の学生であつた。製糸王も代議士も、県会議員も、大学教授も国学者も、幾人かの多額納税者も勅選議員もこの藤森塾から生れたのだつた。

(寧次の「帰国俳人の身辺小品」より)

明治三十七年(1904)

「この頃より俳句を作る」と色々な物に書いている。

下諏訪町は僕には縁故の深い町である。父の従弟妹、母の姉妹、僕の従兄等多数の親戚がある。従兄小口貫一は新聞人にて子規の渴仰者であり、書架には「頼祭書屋」「子規隨筆」など俳書が多か

明治三十八年（1905）

藤森塾を終わってから何をしていたか定かではない。しかし上京して牛込区宮比町神楽坂上（現在の新宿区神楽坂二丁目）所在の尾澤薬局に勤めたのはこの年ではないかと思われる。そして中野三允、松山翠汀、里見天水等と交友句作し、愚寧、月州、逢嬉楼、野決明等の号を使用していた。

った。明治三十七年頃だったか警察署の坂下にあった小口友亀氏宅の向い側の家で催された俳句会に従兄と共に参座した記憶がある。

（寧次の「帰国俳人の身辺小品」より）

尾澤薬局と同姓ではあるが全く血の繋りはないらしい。現在も同名の薬局があるが、経営者は昭和初期より異姓の別人であるとのことであった。

明治四十年（1907）

七月十五日 帰郷。

七月十五日 晴

午前岩波、平林両氏来り寧次の生命保険の契約を
なす。寧次終列車にて東京より帰る。

十六日 大に暑し

午前中谷医師寧次の体格検査に来る。生命保険加
入のため。明日出立につき全家族、カマシ、中林、
小川、高木の各家族を加へて写真をとる。

七月十七日 岡谷を発ち横浜に向う。

十七日 晴 暑し

午前七時三十四分上りにて寧次出発。見送りの人
人懇志の花束など贈りくれたり。郁司（注・弟）
上諏訪迄送り来る。

二十四日 晴 暑し

本日寧次横浜出帆につき郁司を諏訪神社に無事の祈願のため七時発にて参拝せしむ。一時下りにて帰る。

本日出帆のところ船客満員のため次便にて出帆の旨電報ありたり。

(父 喜三次の日記より)

祝尾澤寧次君渡米

薰風に帆を挙げ君の首途哉

松山翠汀

八月三十一日 シヤトルに上陸。

十二月十五日 父喜三次死去(五十五才)

明治四十五年(1912)

五月六日 継母きくよ死去(五十才)

大正二年（1913）

「外国人土地法」カリフォルニア州議会を通
過。

この法案に抵抗する学生、青年の同志と共に
反対運動に参加する。

千九百十何年だったか記憶のページが破れて判然
としないが、とにかく加州土地法案に憤慨したそ
の当時桑港在住の学生青年の一人は市民権獲得期
成同志会なるものを組織して、土地法案の根本的
解決は日本人の帰化権獲得にありとして運動を起
したのだった。現在の帰化期成同盟の如く全米的
な強力な組織を持ったものでなく、誠に微々たる
線香花火式な半歳足らずで自然消滅したサイドシ
ョウにもならぬ帰化権運動であったにしても、学
生の純情と青年の意気をもってかなり真摯な熱意
のある運動であった。

そもぐの始りは小池祖重郎、小川亀重などの青
年論客が加州土地法案は在留民の発展上の問題に
とどまらず国家国民の問題であるにも拘はらず一

般日本人があまりにも無関心の態度なるを慨嘆し、演説会でも開いて一つ眼を覚してやらうと言うのにあった。時局演説会の席上で「根本の解決法は市民権獲得運動を起すにあり」の結論に一致し、同志三十余名を発起人とし、数日後に創立委員会を開き「市民権獲得期成同志会」なるものを創立し、同時に宣言書を発表した。主なる実行委員は委員長小川亀重のほか小池祖重郎、小室昌一……略……尾澤寧次等で、僕は幹事を兼ることになった。

(「三十何年か昔の

市民権獲得運動の話」 寧次

日米時事の「移民帰化法

成立祝賀記念号」より)

注・小川亀重、小池祖重郎の両氏は諏訪の出

大正四年（1915）

三月 「海紅」創刊。

州立 加州大学卒業。

大正五年（1916）

薬剤師の国家試験に合格。

サンフランシスコにて薬店開業。

大正六年（1917）

身で寧次と同じ船で渡米した人。

小室昌一氏は後年スタクトンタイムスの社長をしながら鏡太郎の俳号でデルタ吟社のリーダーとして活躍した寧次在米中に最も尊敬した句友。

生活と云ふ事が三十を越した自分の胸に鋭く刃のひらめきを与えた時、愕然として過去の放徒なる生活を悔ひせしめて、決然として自己の将来に想に到せしめた。多年住みなれた霧の都桑港を去ってスタクトンに自分を発見した。

スタクトン市は五方に足らぬ田舎町である。西を眺めても東を望んでも山一つ目に入らざる加州大平原の中央に位する新開地である。幾十重に亘った平原は機械の力で耕作されて行く。秒時秒時にテールに乗せられる野菜も果物も此地から米國全土に運れるのである。

賭博の公開に近い此町は軒を並べて賭博場が夜の淫蕩の風を受けながら血走った眼を煌めかして居る。毎晩のように生臭き刃傷沙汰は暴れ狂ふた賭博場から起って来る。かうした町を特に選んで自

大正七年（1918）
スタクトン市にデルタ吟社創立される。

己の墓場とした自分は矢張り欲に吊られた商売大切からである。此町全体が他の町よりは活気があり錢使いも暴くなつてゐるのである。初めて店を開いた其日から客が来る。日本人も伊太利人も来る。黒ン坊も来れば支那人も来る。しかし同じお世辞を繰返へせしめることがお世辞嫌ひの自分を苦しめてゐる。

（「薬屋の主人公となるの記」 寧次

「東京薬事新報」より）

デルタ吟社の前身は花藻会、その又前身が鈍栗会、何れも鏡太郎と僕がスタクトンに移ってから創めたものだった。

デルタ吟社は鏡太郎と僕がスタクトンに転住した

翌年の一九一八年に寧次居に於て第一回の句会を
持ったのに始まる。

当時僕は「日本及び日本人」に投句してゐた関係
上碧梧桐を主張したが、四門は頑強に一碧楼俳句
を推薦し、茲スタクトンに海紅俳句の根がおろさ
れたのだった。

スタクトンを一碧楼俳句の句どころたらしめたの
は鏡太郎の努力功績なるも、一碧楼俳句を輸入し
た元祖は僕でも鏡太郎でもない。現在アゴスト同
人として作句せざる宗匠、十年に一句の寡作俳人
四門であつたのだ。四門が極力一碧楼俳句を推奨
しなかつたら碧梧桐へ流れてゐた筈だ。

当時の同人は櫛山四門、三輪古絃、太田未央、中
尾野人、松井緑陰、上利与天地、国森本城子、紀
樗山、小室鏡太郎、尾沢寧次等にて、岡本紫峰は

当時句作を中断してゐた。

そしてデルタ吟社が本格的に作句に精進したのは僕がフランスノに転住した後であった。

(寧次の「デルタ吟社の前身」

「鏡太郎俳句の鑑賞と追憶」より)

尚 大正九年(一九二〇)一月一日の日記に

本日より日本印刷所およびタイムスの権利を小室に譲渡する。禁酒になりての街は淋しく、街上酔払ひ者を見ず静かなり。禁酒の結果は将来廻礼者も少く虚礼の廻礼も追々減少すべし。

と記している故スタクトン時代の当初はタイムスに深く係っていたものと思われる。

十月二十九日 フレスノへ転住。

日記より

愈々四ヶ年間住みたるスタクトンを去る日となった。朝六時起床テンテコ舞をして家を片付けてフレスノに荷物を送り出し、知人の家に暇乞ひに行き、午前十一時五十五分の汽車に乗る。見送りの人らと分かれ汽車に乗れば云ひしれぬ淋しさを感じず。

スタクトンからフレスノまでの車窓の眺めについて井上靖著の「わだつみ」第三部（岩波書店発行）に時も同じ頃のこととして次のように記しているので少し長いが抄記する。

……略……列車でフレスノに向かったのは四月の中頃であった。サンフランシスコからスタクトンに行き、そこで乗り替えて、あとは大平原を南下して、フレスノを目指した。その間に

花の終りかけたアーモンド畑や胡桃畑が散らばっていた。またちよつと見ると、菜畑と間違ひそうなマスタードの畑もあった。しかし、よく見ると、マスタード地帯は人工的な畑ではないらしかった。マスタードに野生のものがあるかどうか知らなかったが、そのようなマスタードの原野に見えた。青い畑はどれも麦畑であった。列車は小さい駅を一つずつ拾って行った。……

…略…

フレズノに近付くにつれて、栽培されている無花果の林や、桃畑が目立って多くなつて行った。沿線の駅駅の構内には、申し合わせたように夾竹桃が植えられてあり、たくさんの濃い桃色の花を着けていた。

サンフランシスコからフレズノまでは五時間の

旅であったが桑一郎（注・小説の主人公名）は少しも倦きなかった。……略……

フレズノの駅に着いたのは夕刻近かった。フレズノは人口十二万の都市であったが、駅の造りは沿線の小さい駅と少しも変わらず、多少人の乗降が多いぐらいのことで、砂漠か平原の中に造られた大集落の駅に降り立った感じであった。駅の建物も小さく、列車からプラットフォームに降り立った人々は建物の中には入らず、建物の横に廻らされてある木柵の方に歩いて行った。

この作品の主人公がフレズノに降り立ったのは一九二〇年で、春と秋との違いはあるが寧ろはどんな景色を眺め、どんな思いを抱いて立ちつくしたのだろうか。それにしても家の契約をしてくれた人は不在であるばかりか何の手配もしてなく、家

昭和三年（1928）

二月七日 ヴァレー吟社結成。第一回句会を
寧次居に開く。

にも入れず、十一月一日入居、ガス、電気が使用
可能になったのは二日の事であったと怒りを日記
にぶちまけている。

スタクトンを去ってプレスノに転住後河西木耳の
来訪を受けて同好の志とレーズン吟社を結成寧次
居を道場としてゐたが、作句生活に真剣に取り組
むため同志を糾合、高邁なる一碧楼芸術を愛する
我々はヴァレー吟社を結成したと記している。

当日の出席者は五明玲子、亀野小貞、河田道子、
山見坂籠子、飯野萩村、亀野景治、加納莊一、河
合伊博、河西木耳、松田佳笑、大石水鳥子、戸田
翠葉、山田秀雄、尾沢逢嬉楼の十四人。

送句・羅府より 片井溪巖子、奥野青珊、関谷香

須府より、桑畑野人

邦字新聞フレスノ欄は次のように報じている。

ベンチュラ街の逢嬉楼居で昨夜俳句同好者の第
一回会合が催された。出席者は……略……で、
先づ会の名称をヴァレー吟社とすることに決定
し、続いて運坐に入り各自の作句が読み上げら
れ、これに対する研究もあり十二時散会したが、
これら同人の作句は中加事報の紙上に公表せら
るべく、また毎月一回金曜の夜に例会を開く筈
だといふ。なお右吟社の生れんとする報道を新
聞で見た羅府の同行者から逸早く激励の祝句が
贈られしよし。

九月三十日 弟武郎死去（三十二才）

昭和四年（1929）

一月五日 デルタ、ヴァレー両吟社連合句会
をスタクトンの鏡太郎居にて開催。

ヴァレー、デルタ連合句会雜感 鏡太郎

……略……何しろ句会は一度に揃はぬまでも四十人といふ人達が入れかわり立ちかわり出席して午後二時から翌朝午前二時半まで打ち続けたのであるから物凄ういほどだった。出句数三百余と聞いただけでも食傷しそうな有様だった。……略……

昭和六年（1931）

五月 渡米中の木村毅氏を招き文学愛好者と
共に移民文学についての話を聞く。

木村毅氏の移民漫談

話題豊富 興味津々

来会者皆な魅殺さる

朝原代議士一行中の木村毅氏は火曜夜文学愛好者のため特におきまりの講演を差し繰り尾沢寧次氏宅で移民文学につき頗る内容の豊富な、そして趣

味津々たる漫談を試みたが、氏はブランドスの名著十九世紀文学思潮史の「移民文学」を冒頭に引用して、

各国の文学がその行き詰まれる文学境地を海外に求むる現代的傾向

より「太平洋時代」に入りて、故国読書界の視線が海外、特にアメリカに向けらるゝに至った仔細を述べ、転じて

大衆文学の勃興とその意義

を詳論し、結論として

太平洋沿岸の日本移民のなかに散在するグロ・エロのローマンス材料を蒐めて共同製作的の雄篇を読書界に提供すること

の文学的価値を力説した。引用例には中里介山、大仏次郎、白柳秀湖の諸作家を始めプロレタリア

作家の細田民樹、小林多喜二諸氏新興作家の殆ど全部に亘る作品を批評の俎上に上げし、且つ唯物史觀的に赤穂義士を取り扱ってみたいとの希望なども述べてゐた。趣味津々たる漫談は二時間に亘って尽くるところを知らず。講演はで、のちも目下「東日」「大毎」に同氏が執筆中の「ラグーザお玉」のことに及んだり、十一谷義三郎の「唐人お吉」の批評に移ったりしたが、米国のみやげとして「おけい」の史実を窄鑿し、これを纏めて一冊の加州移民地ロマンスを創作する意図を洩らしてゐた。主人役の尾沢氏夫妻より茶菓おすしの供応があり、会衆十余名で十二時近くに閉会。猶同氏は昨日南加に向かった。

(五月二十一日附「中加事報」より)

昭和八年（1933）

十月 「病者のガイド」出版。

本書刊行の動機として

米国に居住する日本人には、この特殊的社会に特殊の通俗医療書を必要とする

とし、その記述方法、内容については

専門的難解な熟語用語を省いた

薬品は米国内で買い求め得る配合明らかな医薬及び新薬とである

病名はイロハ順に記述し、巻末の索引とにより病名でも項目でも索けるようにした

と記している。また

此本は米国内出版の医学及び薬学書、日本の医学書、米国の医学雑誌等数十種の専門書を参考として書いたが、あくまでも素人のための疾病参考書であり、治療撰生の案内書であって 医

十一月十一日 出版記念会及び句会。

師や学者の為の専門書ではない
としている。

収録されている病目三百三十七についてその原因、
症状、療法の順で記述。本文七九二頁索引五四頁、
定価五ドル。印刷は東京巢鴨の岩本進進堂である。

記念会 於 新上海楼

同人の玲子、しづく、葉子、千代子、道子、秀
穂、芦水、小紅子、仙坊、碧沙明と安孫子博氏
が出席した。欠席の美篠氏よりは送句あり。

他の会合と違って祝辞も答辞もないかわりに文
学談に花がさいた。

句会 於 玲子居

八時過ぎ玲子居へ席を移して句会。新同人中島
正氏も参加。ホームメードケーキ等を御馳走に

なり散会したのは午前一時頃であった。

時雨るゝ窓べぬれて落ちくる葉の大方はきいろ

玲子

ひよこつれだち歩む地にちらばりて白い穀物

しづく

一抱へ薪をかゝへあゆむ地の片方菊五六種花咲

き
葉子

秋晴軒かげから花だけくつきりはえて居る

千代子

こほろぎ啼くに日向どこやら落葉たくにほひ

道子

菊満開今日朝から客の絶えて

芦水

大輪も小菊も咲きさかり秋の日和つづく

秀穂

人来るにこの庭のゑぞ菊の花

小紅子

秋は馬黒しそこらアズノ落葉　　ただし

すこし寒い日がつづく秋ばれの空ばかりたかく

美 篠

露のとけゆくをみてるほどのわが心である

碧沙明

雨期の今日雨降りだし地の物ぬれてゆくしたし

寧 次

(邦字新聞記事より抄記)

尾沢氏の「病者のガイド」　　半 僕

度々の御報道、日米の大広告にて長友尾沢逢嬢様
兄苦心の名著「病者のガイド」いよく御発売の
運びとなりたること我等の衷心より慶賀致すところ
であります。堂々たる八百ページに盛る起死回
生の靈藥処方日本同胞家庭の救いの神とや申さ

なん。

貧と恋の病馬鹿へのつけ薬さだめしうまく処方

しつらん

繰り返すページに箒もる親切さ嘘にはあらぬ誠

八百

(邦字新聞より)

シャトルの小池君より桜樹二本送りくる。「病者のガイド」出版に対する祝いのためなるべし。

何と歓びの桜であらうか。……略……友の贈ってくれた桜樹の咲く如くわが前途に咲く花の時代は来るであらうか。

奮起せよ。積極的に活動に入れ。

(一九三四年一月二五日の日記より)

昭和十年（1935）

十二月二十七日 妹千代野とその夫笠原延徳
の四男政人を養子として入籍する。

一月十日認めぬの郁司よりの手紙を受取る。

自分の主義としては一切を残さず、家系も断絶せしむるを希望し居りしも美智子の生存する限り日本の戸籍法は此をゆるさず。

自己の心境にも変化を来たし、老後のことも考慮して政人を養子とすることに決意し、総ての手續を郷里に委嘱したるに、一九三五年十二月二十七日入籍手續を終りしと。

これにより自分の責任の重加を覚ゆ。

（注）美千代は寧次の私生児として戸籍面に記載されていた。昭和十一年一月十八日結婚除籍となっている。

（一九三六年一月二十五日の

日記より）

昭和十六年（1941）

一月一日附世界朝日新聞に「日米対立の不安に直面する同胞生活」を寄稿し、概略次のように言っている。

非常時下二千六百年を送り昭和維新の第二年を迎ふ。来る一年間の情勢を思ふ時多事多難、在留同胞生活の上にも幾多重大な意義と覚悟とを必要とすることを痛感する。

我々の故国日本は国内的には十数年来政治的騒乱、国際的には日支事変は既に第五年に入るも平和の曙光すらなく却って拡大化され、日米関係は悪化の一途を辿つてゐる。

日本の大東亜共栄圏建設の企図は直ちに太平洋制覇を意味するものとして米国の敵性行動は露骨に強行され、太平洋問題に関する限り日米兩國の国交の摩擦は免れない。太平洋の制覇こそ

実に兩國にとり国家存亡の鍵である。

かくの如き暗雲低迷の不安下にある在留同胞社会は表面不動の落着を見せてゐる反面深刻なショックを受け動揺してゐるのも事実だ。日米関係が調整されざる限り日本社会は平穩無事ではあり得ない。

迫害と排斥と侮辱と苦痛とを耐え闘争して漸く今日の基礎を築き、二世の成長と共に事業は本格化し、何れも孫を擁して子孫繁栄、安泰生活に入らうとした時、突然日米関係は悪化し狼狽せしめられた。我々はこのまゝ行倒れるのではないかと不安ならしめられた。日米対立が如何に推移しやうと我々は国交調整の一役を担つてゐる自覚を持って対処して欲しい。

また 八月二十二日附新聞のヴァレー吟社句会の記事の後半には次のように記している。

凍結や龍田丸事件以来在留民の神経は神経過勞にすっかり疲れ果てゝゐる。何物にも動揺しなかつた筈だった同胞は顔色を失はなかつた者があらうか。来るべからざる最悪の場面を予想したからだった。

日米戦争に対しては米独戦争よりは米国の与論が一致する危険のあることを覚悟してゐねばならぬ。子を守る為に永住して行かうとする日本人の決心は尊い。一世と云ひ二世と称して特殊的に観察し議論を持ち出す人々の心理は滑稽だ。切っても切れぬ親子である。米国市民である事を名譽と思ひ込んだり、市民権を最高の学位と思ひ誤ったりしては愚しい。

十二月八日（米国時七日） 日本空軍ハワイ
真珠湾を空襲。日米戦闘状態に入る。

もし不幸にして最悪の日が来たら我々の文学はどうなるか。俳句にしても一時故国を風靡してゐた絢爛たりし戦争俳句も下火となった今日、故国への通信の機会さえあったら日支事変が生んだ戦争俳句に代って敵地生活の体験が産む素晴らしい敵地生活俳句なる新しい俳句が華々しく登場され得るだらうが、戦争になったら日本へ送句の方法が無いから我々仲間だけでも是非とも敵地生活俳句を残しておくべきだ。

日記より

十二月七日（日）

日米遂に開戦。ラデオは突然街々に家々に緊張して日本空軍の真珠湾爆撃を伝ふ。実に一瞬間にして米国の上下は度を失って愕然、度肝を抜

昭和十七年（1942）

かる。

号外は飛ぶ。日本人社会はただオロ／＼と精神的混乱に陥る。余りの重大事にして為すところを知らざるの状態である。……略……

日記より

一月二十六日

臥床一週間になる。はかばかしくない。

朝ミセス木村来宅。一時間程話してからワイフと共に掛ける。松岡氏見舞に来る。矢張り日米戦争の話で終始する。

夜ワイフ婦人会の人達とホールス三宅氏宅へ息子の入営壮行と見舞に行く。三宅氏宅ではこれで三人が入営である。ブラックストンの川口君の所でも四人入営するやうになるのださうだ。

一月二十七日

痛む。思ふやうにはかどらぬ。

潔も明朝入營する。知人の子供達がもう沢山入營してゐる。潔と同時に入營する青年達の中にも金川、三宅、佐々木、山際、宮本諸氏の子供達と数名ゐる。

二世の大部分は米國を愛してゐる。生れた國といひ、日本よりは機械文明の發達したこの國の市民であることを誇つてゐる。日本を父母を輕侮したがる第二世は米國の兵役に就いて米國への忠誠を強要され、米國への愛國心を涵養され、米國軍人としての教養を受けるのである。日本への総ゆる非謗と輕侮とを吹き込まれ、日本人に対する敵愾心を養はれるのである。三年四年と戦争が続きやがて平和になつて歸つた來たら

どうなるだらうか。米国軍人の息子を中心としてゆくこれらの家庭は思想的にどう変化してゆくか。……米国に日本人の血と皮膚の色とは違ってゆくであらうが、日本国民としての精神は一代限りで消えて終ふのだ。……

一月二十八日

潔今朝入営の途に発つ。家内が送ってゆく。外は雨が冷めたらしい。

パナマ運河守備兵として同地にゐるメキシカン青年ベン・ユルリタから手紙が来た。飛行隊を志願するので推薦状を書いてくれとのこと。余りの元氣さに驚き家内も失笑。僕は敵国人であるのだ。

一月三十日

要塞地帯より敵国人の立退を命じ出入を禁ずる

旨の命令出ず。陸軍省の要求により検事総長よりの指令である。昨夜の夕刊にありしも本夕の新聞によれば各地殆どである。あらゆる場合を覚悟せねばならぬ。奥地移転は何でもない。

今朝のエキザンナーには敵国人のあらゆる營業権利を取りあげて終ふことにつき上司の意見を伺ふてゐるとの報道がある。この運動は中央政府はオーケーしないと想ふ。

ヒリップピンのマクアーサー司令官に対して日本軍が降伏を勧告したるはヒ島の運命迫る如きを思はせるものがあるが米国民は一斉に之を嘲笑を以て迎へてゐる。マクアーサーの孤軍奮闘は肉躍るやうな勇壮なものを思はせる。ヒリップピンは一挙に占領出来ないのであらうか。今後更に一ヶ月二ヶ月占領に時を要してゐる時はそこ

から日本軍に不吉なものが生れて来はせぬかと案じられる。

昼帳簿などする。捗々しくない。夜武にドライブさせて床屋に行く。之でさっぱりした。

一月三十一日

市民登録に要する写真撮影のため神山写真館に行く。登録用と別に夫婦にて撮影す。奥地移住離れくとなることもあり得べく十数年ぶりの撮影なり。

山村君から電話にて州知事の薬剤師免状没収云云の対策についてどうするかと心配して意見をたづねてくる。

今晚ターミナル島の日本人一斉に拘束さる。乱暴なことだ。

本日より敵国人の再登録施行さる。

二月四日

雨ふる。午後郵便局へ行き外人登録を為す。

二月十九日（米国時） ルーズベルト大統領
軍司令官に特別の権限を与える大統領令書第
九〇六六号に署名。

五月三日（米国時） 西部沿岸地区在住日本
人の強制退去と抑留についての指令下る。

五月十六日 フレスノ仮収容所に入る。

十月二十四日 アリゾナ州ヒラ収容所へ移る
ためフレスノを発つ。

昭和二十年（1945）

八月六日 広島に原子爆弾投下さる。

八月九日 ソ連対日戦参加、満州へ侵攻。

長崎に原子爆弾投下さる。

八月十五日 日本無条件降伏。

九月二十六日 ヒラよりフレスノへ戻る。

年月不詳の新聞の切り抜きに

尾澤寧次氏・北米俳壇の巨星、収容所で発病せしも健康回復、フレスノで再び薬店開業、独特の皮肉を連発してゐるらしとある。

昭和三十一年（1956）

三月二十一日 兄健吉死去（七十二才）

蕩子老ゆ

寧次

明治四十年二十一才にて父の病臥中を渡米、米土を踏みていくばくならず父の訃報をつかむ。五十回忌に帰国墓参を促がされしも果さず、父逝きて五十一年、在米五十一年、七十二才となる。

父憶ふ雨のおと故郷から来るよう熟睡す

こほろぎとびさびしき灯影すおのれ

山の湖昏れてさざなみ心のどこかにふるさと

枯木寂寞産声の記憶はない一人ぼっち

はたたの子動くまゝ太陽沈み七十余ン才

信濃の夢いくたびか永住する決心に椿が赤い

（短歌）

雪とざす信濃の国のうぶすなをゆきざり人のごとく捨てきし

古希にしていづこさすらふわがこころ明日を生
くべき業いとなむ

住み古びボンボン時計過去をうつ胸にひびくは
死ぬる日の脈

きびし世をかりそめごととなまけ生き文学老人
あはれ貧しき

雑草のわが生涯も芸術も枯れ果つる日みぞれよ
降れよ

人ごころみな冷めたかりうつし身に涙湧きくる
濁りし涙

死ぬる日は遺産は無しや一びんの青酸加里を妻
に残さば

これらの俳句や短歌は父の五十回忌の折とにかく
一応帰国をと後取りの弟から呼び掛けられた時の
作と思われる。実際に作ったのは後年の三十三年
であったと思われる。

昭和三十七年（1962）

妻わか大病し長期にわたり入院。

短歌 価なき長寿

妻病みて貧しく

友情の尊さに感謝

頑健の妻病みて重態に陥り、はからずも多数の方々に迷惑をかけてしまう。親友句友諸兄姉より受けたる御懇情と御同情に対する深謝の辞と併せて貧困の憤りとの教首

入院費意識してにや妻拒み医師去りたりしあとの
空告白

重態をわけて親しき友に告げややに心のおちつき
おぼゆ

悲しみは心に迫る金のこと妻の病苦をしばししり
ぞけ

百日の入院費用ととのへたり安んじねむれ呼吸白
昼

子を持ってば子をのみ語ると空穗の歌子なき夫婦は
孤独に老ゆる

情うく妻病む日々の食物は貴重と知りぬ箸をお
さめぬ

厚意うく料理貴ふとしそれぞれに夫人の個性あり
と思ふ

店裏の貧困に臥し妻病めば喜寿ちかき身に飯炊き
習ふ

病弱のわれに過勞の日はつづき一月一日血痰を喀
く

主治医としドクター平友情の奉仕たふとし妻生き
てあり

友誼など荒れし世相にまごころの一家ありしよ語
りてつきず（木村よしみ夫人へ）

秋晴れて一樹のしげり老い栄ゆ句友よ親し誠意う
けつる（上丸子雫夫妻へ）

遠く来て一家の至情秋晴るる句友富あり若き妻あ
り（中島正夫妻へ）

毎晩に長距離電話誠実な句友善人柿熟るる秋
（増本美篠夫妻へ）

妻病めばキャンプの日にも看とりうく小春日の窓
髪すきたもふ（伊藤重登夫妻へ）

半歳の奉仕うけたり逝く春を身にまよふもの友あ
りと思ふ（垣内未草夫妻へ）

移り過ぐ一世社会今ふにして情誼にあつき人を見
たりし（河合しげ子夫人へ）

恩義うくいっしか雪の冬すぎて桜咲く国旅にたつ
人（平百子夫人へ）

荒瀬保タエ子夫婦の五百弗感激の涙多額なり固辞
す

シカゴなる荒瀬潔にマリ夫婦厚意たふとし為替を
収さむ

死線越ゆおきなおうなや世の悲劇地上冬ざれ価な
き長寿

これらの短歌は新聞紙上に載せて感謝の意を表し
た時の一部である。漸く帰国への気持になった時
の出来事だった。持ち帰る財産とて無いところへ
多額の入院費用、毎日の食事など、病身の自分を
励ましながら多数の方々のお世話になって生きの
びることができたらしい。

昭和三十八年（1963）

二月？ 送別句会

（多数の謝意の短歌を省略した。記載漏れの方々のご寛容を乞う）

私達ヴァレー吟社の尾沢寧次氏御夫妻の送別句会
は賑わいました。感傷的な涙っぱいものになるか
と思いましたが、なかなか楽しい集まりを持つ事
が出来ました。晚餐会の後席を雫居に移し暫く句
会の気分を作り出す為の雑談の最中瑞穂ひよっこ
り立ち上り送別の辞を述べれば、寧次氏もそれで
は何か言はねばなるまいとやわら立ち上り謝辞を
述べるとゆう型破りのものとなりました。南加か
ら五明玲子女史の送句もお喜びでした。今後氏の
毒舌も皮肉も俳句の指導も海の彼方からとして句
坐は例により真夜中一時となる。星空を仰ぎつゝ

さみしさを一人一人の心に秘め句友の車は東に西
に春夜のしじまを去って行きました。(抄記)

(上丸子 零 記)

惜別句

寧次

山に雲の影悲しレディオの悲歌

加州の山春めく牛も馬もしっかり見る

泣いて別るゝまなこ合せ夕迫る

送別句

ひと送り眼をやる山のかなたの遠い空 玲子

五十余年この地に生き日本の桜が待っている

正

富士は昔のそのまゝでよろしい 美 篠

球根芽が出て師と別れる日近づく 未 草

師を送る今朝シエラ山脈雪少し 瑞 穂

山鳩啼く声意識する師発つ日近づく 千代子

別離なき世をねがふ心に白き雪柳

雫

二月二十七日 送別壮行会

中加有志主催によりバスク・ホテルにて送別壮行会が催された。出席者六十余名。

三月二十二日 離米。

三月二十三日 羽田着五十六年ぶりに初めて

半世紀去り着きしよ羽田春の雨はらから

故国の土を踏む。

寧次

東急ホテルに一泊、二十四日東京世田谷の養子まさんどの家に入る。

五月下旬 墓参と郷里の人々への挨拶のため一週間諏訪へ行く。

岡谷の駅に汽車は着いた。記憶に無い町の光景だ。弟や甥姪に案内されて生家の玄関に立つ。

庭に面した広い座敷に伴はれた。五十年前前に大火のため消失した生家は再建されて昔の面影はな

く、間取りは同じようだが昔の家を圧縮した形だ。庭は狭まれ、池は埋められ、上の土蔵一つだけが残されてあった。黒々とした桔梗の紋ははっきり瞳に焼附いていた。これを仰いだ時想い出に心は濡れてしまう。

数年前父の五十回忌の時作った短歌に

ニヒリストにや蕩子にや老ひ桔梗咲き郷愁の胸
疼き泣く花

がある。弟に導かれて仏壇の前に坐した。合掌したら涙がぼろ／＼流れ出る。涙が残存していたのだった。

座敷に見覚えのある額があった。僕の記憶を蘇がえらせる為の物であったかもしれない。これは僕の六才の頃祖父の代に佐々木弘綱、信綱父子が家に滞留していた時の物であり、前書に「博政ねし

にともなはれて浜村の渚をゆく」とある。

諏訪の海のなぎさにたちて舟まてばくいな鳴く
なり芦の葉がくれ

という歌であった。僕の句

舟一つ湖にあり父憶う日

雨のため翌々日山の墓に詣でた。代々の石碑は時代を物語るように変遷していた。一族の墓に花と線香と水を供えて合掌した。仏壇に不幸を詫びた時と同じ悲痛の感慨が胸に迫って涙が流れた。これも先年の作品短歌

五十回忌父にぬかづく墓遠く瞭ぬれる馬鹿馬

鹿馬鹿

それでも今五十六年ぶりに父の墓参を果したことは満足であった。

山の中腹を歩いてお寺の裏に出て浜叔父一家の墓

五月二十五日 梶の葉会歓迎句会

に詣でた。寺の裏門を出ると広い石畳である。巨石な藤森先生の頌徳碑が建てられてあった。

胸にお墓の草の青さ重し岡谷の煙

石碑の名みな思い出あり線香折れやすい

土蔵の桔梗の紋黒く庭の寛に水漏れ

諏訪は碧梧桐の日本俳句時代から俳句の盛んな土地である。下諏訪には海紅俳句の結社梶の葉会、山田蒲公英を城主に林鷺水城を家老とする海紅俳壇の大藩があり歓迎句会に招待された。蒲公英、鷺水城両氏の案内にて水月園に登り一碧楼師の句碑に詣でた後、諏訪湖畔高浜温泉旅館の会場へ案内された。作句、選句、句評を終り晚餐に移る。当夜僕は作句も選句もしなかった。梶の葉会会員十三名が会し盛会であった。

六月二十三日 東京同人による歓迎句会。

皇居内パレス・クラブ・ハウスにて歓迎句会を開いて頂く。会者二十六人、なか／＼の盛会であった。乗馬クラブの隣りに寧次歓迎句会々場の張紙があった。たづ子夫人、寒骨、晩甘、あつみ等の長老をはじめとしてなか／＼賑う。

開会の辞、夢舟。歓迎の辞、斉藤恵嬢。寧次の俳句について、寒骨、あつみ。自己紹介。午餐の後記念撮影。それから一思さんの案内と説明にて皇居内を参観する。或る俳人は明治を懐しがり、或る者は無条件降伏を語り、或るものは松の廊下を偲んだりした。平家造りの百人番所があり広場があり高い石垣がありチャンバラ映画に出て来そうな風景はちよつと楽しかった。ハウスに帰り出句、多加士の披講、句評に入る。妥協を許さない辛辣な句評が展開された。句帖の贈呈を受けてのち懇

親会にはいる。羽六さんの謡曲、穂さんの黒田節、あつみさんの上海の花売り娘、武夫さんの歌謡曲などくすっきりオミキがまわる。最後に寒骨さんの発声で木曾節の合唱となり寧次万歳をうける。答令として僕は海紅俳人万歳を三唱し八時頃散会となる。

皇居内にて

百人番所武士のすがた見えない草ほこり

お城の石垣巨大なる石に太陽照る

本丸跡の夏草枯れ徳川明治夢のあと

(墓参のため諏訪行以降)

「帰国俳人の身辺小品」より

昭和四十年（1965）

八月下旬頃いくらか身体の調子が悪かったらしい。

九月一日気分が悪くなる。

（この頃大量に鼻血をだしたことがあるが

一応収まる）

昭和四十一年（1966）

三月十九日 弟郁司死去。

四月三日 葬儀参列のため諏訪へ行く。

昭和四十二年（1967）

六月二十八日 脳溢血にて倒れる。救急車で

世田谷病院に入院。

没後発見された遺書は九月一日に書かれている。

寧次最後の日記

六月二十七日 快晴

米国の城しげる氏に阿部喜三男氏の渡米に関し

七月二十二日 午後八時十五分死去。

行年八十才。

二十三日 通夜。

二十四日 葬儀。

慈海院静澄紅蓮政寧清居士

ポピー吟社をねがふよう依頼状をエヤーマイルにて送る。句録社に維持費二千元を現金封入にて送る。

郵便局にゆきて後一人にて散歩する。

礼子中学の父兄会に夕方六時にでかける。

政人七時頃帰宅。

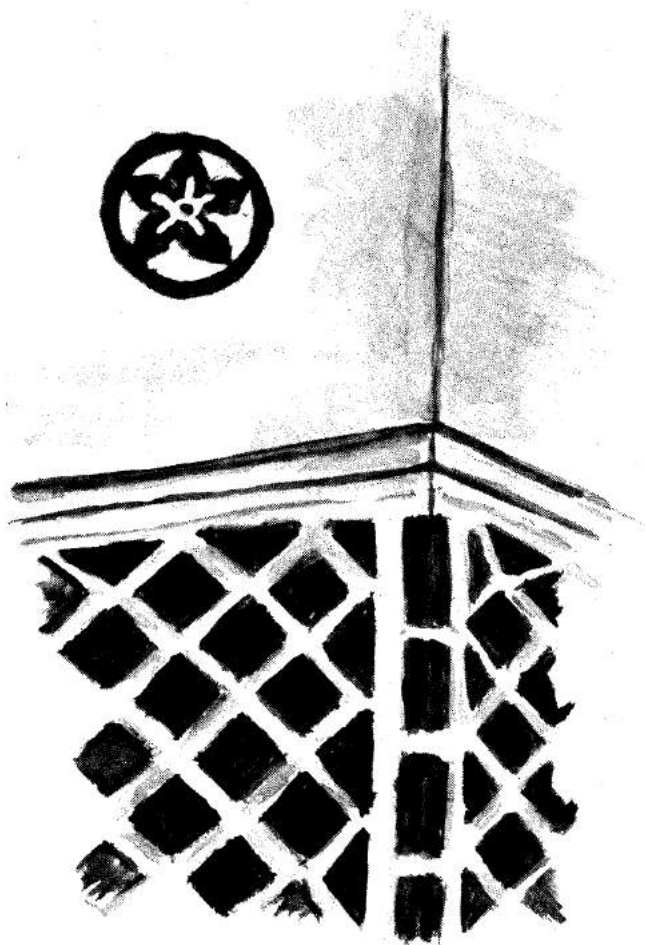
昭和五十四年（1979）

三月三十日 妻わか死去（九十才）

慈徳院心華妙操清大姉

在米中病身の寧次に献身的に奉仕し、寧次を健康
体で日本に届けたわか、寧次の遺書に「わかを頼
む」と書かれたわか、スタクトン時代結婚届を終
っていたのに日本の戸籍に入籍したのは帰国後の
三十八年五月であったわか。五年間入院、葬儀に
血縁影山家の一人にも参列してもらえぬ寂しい最
後であった。

かくて在米五十余年の寧次の総ては終った。



あ と が き

この句集は日米開戦からヒラ収容所生活を終わるまで約四年間の戦中俳句集、寧次の言葉を借りれば敵地生活俳句集である。

在米五十年間の寧次の生活は俳句によって支えられたといっても過言でないと思われるので、スタクトン時代から開戦までの句を「いきづき」句集の句としてこれに加えたが、これはあくまでもつけ足しである。

「病愁」は寧次自身により一応の形を整えていたが、「統病愁」と「いきづき」の句は私の選によった。そしてこれらの句は「海紅」やアメリカの邦字新聞に発表されたものによらず、寧次自身が持ち帰った句稿によった。これは私の時間的空間的な理由による。「非土の情感」は寧次在米中の俳句観、ヴァレー吟社での指導理念であったと共に日本に在る同人への理解を求める呼び掛けの一文であったと思われるので併せ収録した。

年譜は、親族達ですらその詳細を知らない事が多いので、私にわ

かった範囲のものを型破りの形式で頁数も多くこれにあてた。

生前の寧次に戦時中の句だけでも句集にしたいという気持のあったことは薄々感じていた。所謂移民ではなく棄民として生きようとする時は決心し、蓄えも無のまま「棺桶をかついで帰って来たぞ」と日本の土を踏んだ浦島太郎はその希望をはたすこともなく僅か四年で生涯を閉じてしまった。そして、句集として残すに足る句なのだろうか？という私の何年かの疑問の後こんな句集が出来上った。

この句集を寧次に代って私の知らない祖父の墓前への供物とすると共に、愚息から亡父へのささやかな贈り物とする。

尚、格別のご厚情を頂いた古きヴァレー吟社同人で今なおご顕在でフレスノから「海紅」へ投句を続けておられる上丸子零さんをはじめ、種々のご支援ご激励を頂いた方々に深謝致します。

昭和六十三年七月二十二日 寧次忌の日

尾澤まさんど

昭和六十三年（1988）十一月二十日発行

著者 尾 澤 寧 治

発行者 尾 澤 まさんど

東京都世田谷区赤堤二一十六―二

